

大学教員養成プログラムの可能性について

三浦真琴・佐藤龍子

静岡大学・大学教育センター

1. はじめに

我が国における FD 活動は、ようやく全大学の 3 分の 2 にまで浸透し（実施大学数 458 校、構成比 66.8%、2002 年）、その活動内容も多岐に亘っている。しかし、大学院時代に教師としてのトレーニングを受けていないことや、採用に当たって教師としての資質を確認していないことを FD 活動に対する疑念として抱いている教員も存在している。私見では、この疑念には二通りあって、教師としてのトレーニングを受けてこなかった人間に教師としての資質開発を求めること自体を疑問視する考え方と、大学院において教師としてのトレーニングが実施されない状況が継続すれば、FD 活動は際限ないものになってしまうのではないかという考え方である。

確かに、我が国の大学では、採用に当たって教師としての資質を確認するシステムが定着していない。ヨーロッパのように大学教授資格があるわけでも、アメリカのように選考時に授業を実施して教師としての能力を確認する制度があるわけでもない。とはいえ、教師としてのトレーニング・プログラムを作らないまま、一足飛びに教師としての資質・力量を採用基準に盛り込むのは早計である。

また、教師としてのトレーニングを受けてこなかった現職教員を対象に、教師としての資質開発を進めていくに当たっても、そもそも教師として求められる資質がどういったものであるかが漠然としていて要を得ない側面もある。そのような状態のままで、毎年、もしくは何年かのサイクルで同じような内容の研修会が繰り返されれば、教員の中にマンネリ感や停滞感、飽和感、あるいは疲弊感も生じてくる。

そこで、このような底なし感や、マンネリ感を払拭し、FD 活動に新たな可能性の地平を拓くために、ここに「大学教員養成プログラム」を提案したい。それは、現職教員を対象とした FD 活動の着地点を、当該教授団の授業力の向上から、将来の教員の授業力向上にまで広げるという意味を持っている。

2. 現状で考えられること

ここにいう「大学教員養成プログラム」とは、全くの白紙の状態から作り上げるという性質のものではない。最近、FD 活動の中で実施率が高まりつつある「授業参観」と「新任教員研修」に、今後の可能性を見ることは、あながち無理なことではないと考えられるからである（FD 活動を展開している大学の 3 割近くが「教員相互による授業参観」を実施し、同じく 3 分の 1 以上の大学が「新任教員研修」を実施している）。

まず、「授業参観」によって得られた知見を整理して蓄積していくことが、教師にとって必要な資質をより明確なものにすることに繋がると考えられる。現時点では、その蓄積が新任教員研修に活用されている（と考えたい）。しかし、これらの営みを現職研修の次元で

のみ継続していくのであれば、上に述べたマンネリ感の循環は避けられない。「大学教員養成プログラム」とは、主に上記の活動によって得られた知見や情報を大学教員養成段階におろそうという考え方である。

3. 調査しなければならないこと

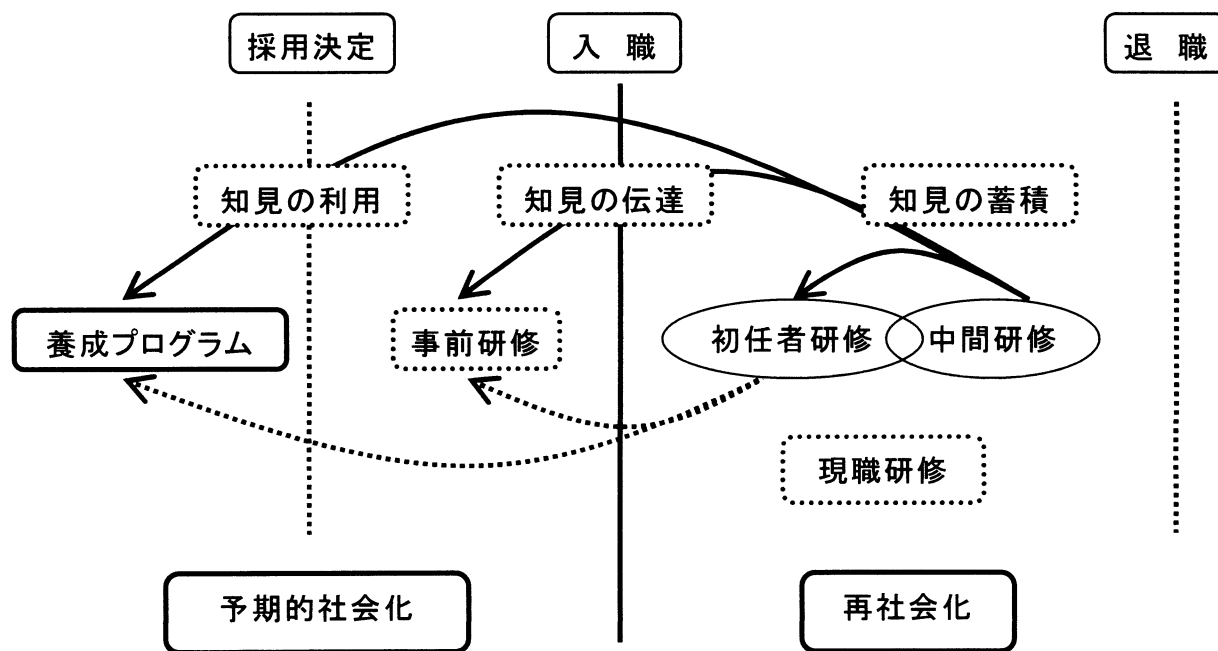
とはいえ、「新任教員研修」の実施形態も、その内容も多様であり、実態が正しく把握されてはいない。「教員相互による授業参観」についても同様である。あるいは活用する大学が増えている「TA」の業務（活動）内容も同様で、この制度によって将来の大学教員に必要なことがそこで学習されているかどうかは、必ずしも明瞭ではない。

したがって、「プログラム」の作成に当たっては、以上の三点についての調査が不可欠である。尚、この調査で必要なのは現状を把握することのみあるのではなく、実施大学における知見を整理し、共有化することである。

この他に、アメリカにおける同種のプログラムについて、詳細な情報や知見を得ることも必要である。

4. 理念型としてのプログラム ～大学教員のライフサイクルに注目して～

現段階では、上記の調査が実施されていないので、理念型を示すに留める。



尚、「大学教員養成プログラム」において、どのような項目や内容が必要と考えられるか等、具体的な提案事項と、パイロット的に実施している内容については、発表当日に報告する。